

# 馬場菊太郎先生の思い出

高岡生物研究会 泉 治夫 (Izumi, Haruo)

馬場菊太郎先生と富山県立高岡高等学校生物クラブとの最初の出会いは、同クラブが1950年7月に富山湾魃が島で後鰓類の研究に着手して翌年4月28日のことで、侍従・入江相政氏のご紹介による。以来1973年まで、クラブの夏季臨海実習に毎年のように参加された。その間、1957年「富山湾産後鰓類の研究」は第1回日本学生科学賞で総理大臣賞に輝き、『富山湾産後鰓類図譜』（1964. 北隆館）刊行に際しては監修をいただいた。

1974年からは、高岡生物研究会（前身は、1952年に独自に研究を開始したクラブOBの会）恒例の夏季遠征自然観察会に参加された。馬場先生による現地指導は31回（延べ124日）となる。私たちが中部日本海沿岸におけるウミウシの調査と研究を70年も継続してこられたのは、馬場先生の温かいご指導のお陰である。

観察会に馬場先生が参加されると、皆の張り切りようは格別であった。我先に海に潜ってウミウシを探す。そこに陶醉に似た充実感があった。初見のウミウシが見つかる、みんな集まり先生を囲んでルーペで覗きこみ「新種では……」と期待が膨らむ。

先生はアオウミウシやシロウミウシのようなごく平凡な種まで丹念に観察され、さらさらとスケッチし彩色されるのが常だった（図1）。その簡略ではあるが素晴らしく的を得た図と、余白いっぱい書きこまれたメモ書きにいつも驚ろかされた（図2～4）。そして「簡単でもいいから図にしておくと、後から調べる時とても印象深く思い出されるんですよ」と言われた。



図1 夜遅くまでスケッチされる馬場先生、1975.8.16 南越前町糠

## 馬場菊太郎

略歴…明治38年（1905）、福岡県生まれ。昭和7年、東京文理科大学を卒業。16年まで九州帝大附属天草臨海実験所。15年、理学博士。18～22年、ジャカルタ医科大学・陸軍軍政地教授。昭和24～46年、大阪教育大学教授。51年、勲三等旭日中綬章受賞。ウミウシの新種記載は約200種に達し、日本近海のウミウシ研究の先駆者としての業績は計り知れない。

主な著書…『相模湾産後鰓類図譜』（生物学御研究所編、1949. 岩波書店）、同『補遺』（1955）、『日本の海浜生物生態写真集』（1958. 北隆館）、『原色動物大図鑑』後鰓類の部（1960. 北隆館）など多数。

スケッチは不明種や珍種が採れた時などは、殆どの者が寝静まった夜中近くまでかかることもあった。それでも「今回は30種達成したぞ」等と花火を打ち上げに海岸へ出ると、先生は「私も仲間に入れてください」と、どんなに仕事が残っていても必ず付き合って下された。私たちが先生を見習ってスケッチし標本作りをしていると、解剖学的見地に至るまで懇切に説明された。ウミウシを通じて先生との交流に、何となく学問的な世界と繋がりを持っているのだという喜びと自負みたいなものが参加者共通の意識としてあった。

先生はいつもゴム草履を履き、茶色の鞆と大きな魔法瓶持参で観察会に参加された。奈良へ帰られる時、それに海水を満たし「皆さんが苦勞して採られたウミウシを今回もチョロマカシていきます」と言われた。私たちは「魔法瓶はさぞかし重かろうに」と心配する一方、研究のお役に立てた事がとても嬉しかった。研究と学問に対しては厳しい姿勢を貫かれる一方、温厚で飾らない人柄にどんなにか感銘を受け指針を得たことか。

1967年10月、高岡生物研究会誌『JANOLUS』発刊に際し、その名の選定には次のような経緯がある。当時、風変わりな *Janolus* 属のウミウシは、敦賀湾岡崎（1955.7.30）・富山湾魃が島（1958.8.17）・富山湾中田（1960.8.4）・越前岬（1966.8.14）で採集されていたが、何れも不明種のままであった。*Janolus* の語源である *Janus* は、頭の前後に顔を持つ古代ローマの神である。門戸の守護神であり全ての前（初め）と後（終り）を司る。*Janolus* 属は未知の分野とその解明を象徴的にイメージする魅力あるウミウシ群であり、私たちの過去の成果と茫洋とした前途と希望を重ねて会誌名とした。そして1970年、馬場先生はこれら過去の採集記録と原図を基に学術雑誌『The Veliger』に発表されたのが、日本産 *Janolus* 属の新種第1号であるコヤナギウミウシとカラジシウミウシであった。

1975年8月、南越前町糠での観察会にも馬場先生は参加された。この折もコヤナギウミウシが採れた。夕食後、先生がそれをスケッチしておられる時だった（図2）。以前から気になっていた事を冗談半分に聞いてみた。「先生、コヤナギウミウシの名は小柳ルミ子と何か関係があるんでしょうか?」と。するとポツリと言われた。「そうです。」一同「ワハハ。」

美人歌手・小柳ルミ子がデビューしたのは丁度1970年で、翌年「わたしの城下町」が大ヒットした。柳の葉の形をした囊突起を持つウミウシの和名を決めるに当り、茶の間で奥様と一緒に小柳ルミ子の歌番組を見ておられる姿が思い浮かんだ。そして意外に洒落な一面を持っておられる先生にますます魅せられてしまった。

1978年の観察会は能登半島先端近くの木の浦海岸（図5b）。私は遅れて出発し、穴水駅に夕刻到着の先生を出迎えた。奥能登は初めてとの事で、名所「白米の千枚田」で車を止める。海に面する棚田の小さな一枚一枚がほのかな茜色に染まり、人影も疎らで静かな時間が流れていた（図5a）。持てる知識で千枚田の言い伝えなどを話していると、「交通安全のお守り、いかがですか。ひとつ200円です」と農婦が近づいて来た。すると先生は「私の名前が馬ですから」と藁馬のマスクットを買われ、

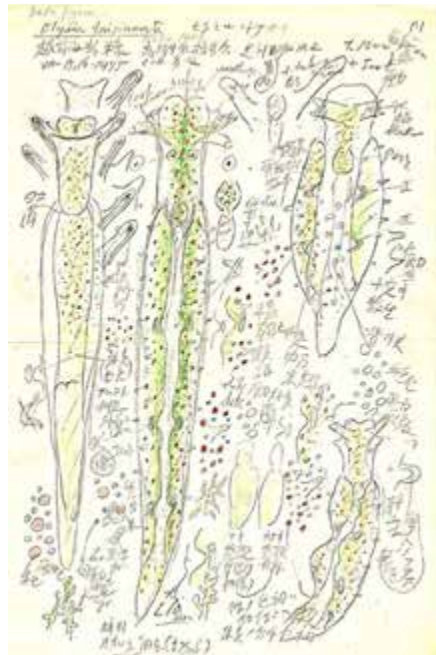


図2 コヤナギウミウシ図, 1975.8.16 南越前町糠 図3 ヒラミルミドリガイ図, 1975.8.16 南越前町糠 図4 簡略ながら的を得たスケッチ



図5 a. 白米の千枚田に立つ馬場先生, 1978.8.4; b. 馬場先生を囲んで, 1978.8.5, 能登・木の浦

靴の持手に付けられた。後年、先生のお宅へ伺った時、[千枚田の藁馬]は奥能登の思い出とともに大切にしておられるのを知った。

この観察会の帰路、氷見市中田海岸の橋本屋旅館に宿泊した。夕食後、例によってウミウシ談義が始まると、先生は旅館の箸袋を利用し、囊舌目の肛門と生殖門の位置関係や、ミノウミウシの心臓の位置などを鉛筆でさらさらと描かれて説明された(図6)。翌朝、先生にとっては25年ぶりの懐かしい虻が島へ案内した。午後、この年2月に亡くなられた生物クラブ顧問・安部武雄先生宅へ寄り、霊前に焼香され奈良へ帰られた。

1989年、敦賀半島立石岬での観察会は、馬場先生(84歳)最後の参加であった。そして「もしもの事で皆さんにご迷惑をかけてはいけない」と、以後の参加はひかえられた。



図6 箸袋に描かれたウミウシ図, 1978.8.6, 氷見市中田

私たちはCD図鑑『日本海のウミウシ』完成に向けて、手紙でのやり取りは勿論、新たな記録や標本・写真・原図・目録などを携え何度も先生宅へ伺い直接ご指導を仰いだ。

しかし不明種のまま手が廻らなかつたウミウシも相当数に及び、「私が遣り残した仕事は、更に一生あっても終わらないでしょう」と、学問に対する真摯な態度と、残りの人生が少ない事に対する泰然とした心情を吐露されることもあった。

ようやく完成した『日本海のウミウシ』は誰よりも先生に見ていただきたく、早速お宅を訪ねたのは2001年4月初旬であった。濱谷巖先生もご夫人同伴で駆けつけられた。馬場先生は奥様と共に大層喜ばれ、スクリーンに写されたウミウシの数々を食い入るように見ながら私たちの説明を聞き、細かい点にまで丁寧にコメントされた。

しかし同年11月30日、悲しくも馬場先生は急性肺炎にて帰らぬ人となられた。享年96歳。葬儀に際し私たちは思った。「先生は、この図鑑の完成を心待ちにして、21世紀まで命を繋いでおられたのだ・・・」と。(終)